

PREVENTION No. 187

平成20年3月13日開催

高校生の飲酒実態と県立大和西高等学校の薬物(アルコール)教育

神奈川県立大和西高等学校 阿部 真理子

1、はじめに

本校では生徒たちは毎日様々な訴えで保健室にやってくるが、飲酒が関係していると推測される状況はほとんど見られない。しかし先日1年生男子が「気持ち悪い!!」と訴えてきた。どうしたのか聞くと「昨夜、家族で焼肉を食べに行きサワーを7杯半飲んだ。」とのことで彼は悪びれた様子も無く、そのときの様子を話してくれた。

飲酒経験は低年齢化しているといわれているが、子どもたちを取り巻く大人も飲酒に寛容であり、子どもの飲酒を助長している現状は相変わらずである。こういった環境の中、高校時代は飲酒機会が家族から仲間へと移行していく時期でもある。すでに飲酒経験があり、飲酒に対しての敷居が低くなっている高校生に対し、大人が「飲酒は20歳までダメ」と未成年の飲酒禁止を指導しても説得力は弱い。しかしながら、同年代の仲間からのロコミは利用如何では非常に効果がある指導ツールに変わる。そこで、本校ではアルコール教育に、仲間からのロコミを保健委員会のピアエデュケーションという形で取り入れ、実践している。今回は生徒の飲酒実態及びアルコール教育の実践について報告する。

2、高校生の飲酒実態（本校平成16年度～18年度1学年飲酒実態調査より）

・本調査は毎年6月上旬にアルコール教育前調査として実施したものである。

(1) 回答者数は平成16年度男子102人女子126人、平成17年度男子119人女子118人、平成18年度男子90人女子146人で、年度によって男女比が異なるため、その影響が結果にも表れていた。

(2) 結果

①飲酒の実態は年度によって多少の差があるが、6割前後に飲酒経験があり、その内訳は約6割が飲酒経験ありと答えていた。初めての飲酒は半数以上が中学入学前であり、そのほとんどがビール、チューハイを飲んでいて、初飲酒の理由は「周りの大人に勧められた」が最も多く、「おいしそうだったから」「飲んでみたかった」「興味があった」が多かった。

②現在飲酒生徒の実態

飲酒の理由は「おいしい」が各年度とも一番多く、ついで「理由はない」であり、高校生にとって飲酒が身近なことになっていることが推測される。これは飲酒機会の上位3つが「家族との夕食」「お正月等行事」「家族のお祝い事」であることからいえる。また、飲酒の相手は「親・親類」が最も多く、ついで「ともだち」「ひとりで」の順であった。飲酒後の状態では50%以上が変わらないと答えているが、「気分がハイになる」「酔っ払う」「気分が楽になる」という生徒も10～20%いる。約8割がお酒は自分で買ったものではないと答えているが、飲酒機会・飲酒相手からも、多くが家庭内で保護者や周囲の大人が容認している飲酒であることが把握される。

3、県立大和西高等学校の薬物教育

目的 「薬物が身体に及ぼす影響について理解を深め、薬物乱用防止への的確な意思決定と行動ができる能力を培う。」

1年生 薬物依存の入門薬と指摘されているアルコール及びタバコについて、心身への影響を正しく理解する。薬物を現実問題として捉え、現在及び将来にわたる薬物乱用防止する行動がとれるようにする。

2年生 薬物乱用の実態や科学的知識を身につけることにより、将来にわたり健康へのプラス意識を持ち、自ら理性的な意思決定と行動ができる力を養う。

取り組み方法 保健委員会は自分たちの健康問題として薬物の問題に取り組む。

1年生 薬物乱用の入門薬ともいわれているアルコールについて「保健」での学習を基礎にして、保健委員及びアルコール問題の専門家による実習・講義を行う。

科目「保健」アルコール・タバコについての基礎知識（教科担当教諭）

飲酒実態調査、久里浜アルコール症センターでの研修（保健委員）

「LHR」での薬物教育事前学習（保健委員）

アルコール教育講座（専門家）

計画 5月 保健委員の学習（保健委員は養護教諭の指導及び参考資料やインターネット等資料を検索するなどによりアルコールについての事前学習をする）

6月 保健委員・久里浜アルコール症センター見学研修

保健委員による薬物教育事前学習の実施（調べたことや研修体験をもとにテキストを作り、ロングホームルーム時に「薬物教育事前学習」を行う。）

7月 アルコール教育講座

久里浜アルコール症センターの医師を講師に迎え、アルコール教育講座を開講する。専門家の立場から若者のアルコール問題などの講義（保健委員は講師との質疑応答コーナーを担当）

保健委員が取り組んで感じたこと

アルコールについて深く学ぶことができた。アルコール依存症はとても怖いことが分かった。今回学んだことを将来活かしていきたいなと思った。アルコール学習をやる前は、「酒は体にいいと少しは思っていたけど、それは間違いで、酒は体には害しかないことがわかった。アルコールは避けて生きてはいけないので、自分がアルコールに対して弱いのか強いのかなどをしっかりと把握して、上手にアルコールとつきあっていくことが大切だ。

<生徒の感想>

アルコールは「薬物」というイメージが少なく、つい飲みすぎてしまいがちなんだと思う。その場の雰囲気にならされたり、人に勧められることが多い。タバコと違ってあまり害がないイメージが強い。でも飲みすぎてしまうとアルコール依存症になる可能性があるので十分気をつける必要がある。

一番大切なのはアルコールに対する十分な知識と自分の体質を知ることだと思う。

4、おわりに

前任校から引き続き同じ方法で久里浜アルコール症センターの先生方にご協力をいただきながらアルコール教育に取り組んでいるが、この方法がどの程度の行動変容に向けて効果があるのか、調査等を行っていないので今のところ不明である。しかしながら、実際に久里浜アルコール症センターに研修に行き、自分たちの手で授業を行った保健委員は300人程度になっている。今後はこの実践を評価する方法を検討し、実効性あるアルコール教育を模索したい。